

令和6年度 第4回学校運営協議会議事録

静岡北特別支援学校 南の丘分校

- 1 日時 令和7年2月18日(火) 午前10時から正午まで
- 2 参加者 校長、事務長、教頭、部主事、進路指導主事、教務課長

学校運営協議会委員 7人(欠席 1人)

独立行政法人 高齢・障害・求職者雇用支援機構 静岡支部 静岡職業能力開発促進センター 所長	就労・障害者雇用関係
静岡市駿河区役所 地域総務課地域防災係係長	防災関係
静岡市駿河区保護司(防災予防担当・防犯予防副会長)	防犯関係
常葉大学教育学部 講師	障害福祉・指導関係
法律事務所 弁護士	司法/障害福祉
南の丘分校 P T A会長	保護者代表

3 内容

(1)校長挨拶

先日の2月2日(日)は、南の丘分校開校20周年記念式典を挙行之、学校運営協議会委員の方々に式典に御列席いただき、大変感謝している。毎年この時期に「南の丘商店街」として、作業学習に係る販売会として学習発表会を開催させていただいており、たくさんの方々に南の丘分校に来校いただき、応援していただいている。

今年度の式典及び南の丘商店街における生徒のあらわれとして、当日に向けて準備してきたことを発揮し、「やりきった」という満足感を感じている様子が見て取れ、生徒一人ひとりの成長につながる一日となった。また当日は、駿河総合高等学校の和太鼓部の生徒による公演もあり、共生・共育の一端を感じてもらえる行事ではないかと思う。南の丘分校の生徒にとって、この記念の年度に在学していたことは、折に触れて今後も語り継がれていくことであろうと考える。

自分自身、先輩教員から『共生・共育』について聞いたとき、『共生教育』(共に生き教え育む)と書きたくなるが、共生ポツ共育の「共に育む」は造語であること、共に生き刺激し合うことが共に成長することにつながる、ということを示しているのだ、とのこと。今後の共生・共育を考えると、地域を学びの場として教育活動を展開するなど、この20周年式典を経て、次の新たなステージに入ったと考えている。

(2)令和6年度学校自己評価(報告)

〔専門性①：各教科のめざす姿を明確にした教育課程再編〕

*成果、課題等

- ・「単元配列表」を職員室内に掲示し評価等を書き込み、段階的かつ系統的な指導を意識した教活動の実施につながった。
- ・面談等により生徒を中心とした保護者との情報共有ができた。

＊次年度に向けて

- ・「テーマのある学校生活」として、時期ごとのテーマを意識し、学習の関連性を確認、過密過ぎない学習計画立案を考慮するなどする。

〔専門性②：「学び、考え、発信し合う」姿を引き出す授業の充実〕

＊成果、課題等

- ・職場実習評価、自立活動と作業学習の目標の関連付け・・・成果目標に対する生徒の回答「分からない」が2割⇒どのように感じたり考えたりしているか分析。具体的記述はできていた。
- ・12月より BYOD の導入。導入前の使用に係るルール検討により、大きな問題なく導入できた。

＊次年度に向けて

- ・生徒のあらわれから授業改善につなげる取組を行う。

〔専門性③：業務のスリム化と教職員の時間への意識向上〕

＊成果、課題等

- ・職員室での会話増により生徒理解や授業づくりにつながった。
- ・会議での時間の意識、各自の工夫(To Do リスト など)により時間管理意識の向上につながりつつある。先日から、退勤時刻が19時を過ぎる場合の退勤予定時刻の記入等、事前の申し出をするようにしている。

＊次年度に向けて

- ・個々の時間への意識向上のための取組継続＋組織として指導体制や授業の担当時数等業務の見直しを行っていく。

〔安全・安心：自分の安全と健康を守る習慣と環境づくり〕

＊成果、課題等

- ・「私の人権宣言」を記入し、名札の裏に入れ、生徒の見本として人権感覚の向上等、いつでも意識できるようにした。
- ・内容に応じた集団での健康や性に関する学習の実施。
- ・「保健・体育の授業で学んだことを日常生活の中で取り組めたと答える生徒」成果目標の90%には達成しなかったが日常での取り組みについて60数名の生徒のうち40件以上の具体的回答あり。

＊次年度に向けて

- ・生徒に分かる質問内容の設定や学校アンケートをとる時期やタイミングを考慮する。

〔連携①：分校の存在感の発信と地域活動の充実〕

＊成果、課題等

- ・学校アンケートを実施した後に駿河総合高等学校とのLHR交流等の授業交流や地域での活動等の機会となったため、成果目標は数値的には達成していない。
- ・南の丘分校2年生は防災に係る合同学習発表会に参加。
- ・ホームページ更新回数は、県下で統一されたフォームでの新ホームページに移行したこともあり、低迷している。

＊次年度に向けて

- ・交流実施時に感想等を書き留めておき、双方でやりとりができるとよい。

- ・生徒対象の学校アンケート実施時期を検討。
- ・写真を中心とした計画的なホームページ更新をしていく。

[連携②：進路実現に向け、本人が納得して進む進路指導]

＊成果、課題等

- ・生徒との対話から職場実習や進路希望の聞き取り、実習評価票の活用ができています。
- ・進路希望先との情報共有 3月に3年生は移行支援会議を予定。

＊次年度に向けて

- ・目指す方向を段階的に明確にするために年度初めの進路希望調査のあり方の検討。
- ・生徒が活用できる『キャリアパスポート』にしていくための書式の見直しなど。

【全体を通して】

- ・生徒が「分からない」と回答する背景は何かを検証した。

質問内容や質問の意味が理解できない生徒に対しては質問を平易な表現にすること。

回答に迷いがあり「分からない」を選択する生徒が多いことも考えられるため、例えば質問を読み上げて必要に応じて解説する、選択肢の設定の仕方を検討する、などしたい。

(3)進路状況報告

- ・一般就労 95%、そのうち新規障害者雇用の企業が 26%。福祉就労 5%。

(4)不祥事根絶取組報告

- ・今年度の主な取組として実施した教師を目指したきっかけや理由のスピーチは、教職への使命感を向上させ不祥事根絶をねらったものであったが、先生方一人ひとりの教職のやりがいの再認識とともに同僚性の向上にもつながったと思われる。

(5) (2)～(4)までの質疑応答

D委員：令和6年度学校自己評価について、昨年度からのステップアップを感じた。「分からない」と回答した場合であっても生徒の考えをアンケートの中で聞き取っていると捉えることができると思う。「自己理解」とは、抽象的な概念理解、他者や過去の自分との比較ができるかが関係してくる。「分からない」という回答も大切であり、過去の「分からない」という内容との比較も大切にしたい。「分からない」の質の変化も、教育効果と言えるのではないかな。継続的に回答をとっていくと取組の比較ができるのではないかな。

情報発信については、次のステージにいくために、たくさんの情報があふれていると見てもらえないという傾向を踏まえた上で、誰に何を伝えたいのかを絞るとリーチのしやすさ、絞ったターゲットに見てもらいやすくなると思われる。

B委員：進路状況について、農業を仕事にしたいと考える生徒はいるか、また、これまでにいたか。10年以上前に他地域での農福連携の研修会に参加した際に、ある農業法人の障害者雇用の事例を受知った。実際に障害者の方の実習を受け入れたときに、支援の工夫で黙々と作業をやり続けたという例がある。

A委員：進路状況について、雇用形態はどうなっているか。

⇒ 進路指導課長：農福連携について以前研修で取組を聞いたことがある。生徒からは農業に就きたいという希望はこれまでないが、校内で実施する実習報告会、掲示物等では農業は出てこな

いことから選択肢として提示できていないこともあるかもしれない。今後情報発信の仕方等、検討したい。

(6) 令和 7 年度学校経営計画(案)提案

＊校長から

学校教育目標に変更はなし。

目標具現化の柱として、資料に赤字で記しているところが今年度との変更点。特に「連携」については『地域で学び、貢献する活動を通して』としているが、地域に助けてもらうことも視野に入れ、地域を教室として学んでいく環境を目指す。

令和 6 年度に実践してきたことをブラッシュアップし、今までやってきたことの定着と新たな取り組みを行っていきたい。

＊教頭から

目標の立て方は、成果目標・意義目標・行動目標などあるが、教育活動を数値化し評価することの難しさを感じている。令和 7 年度に向け、抽象的ではあるが「～している」という意義目標にし、その状態になることを目指してそれぞれに具体的な取組計画を立てることを意図している。県内特別支援学校（知的障害教育校）のうち 11 校はこの意義目標を採用しているようだ。

学校経営計画の内容としては、「安全・安心」を今年度の南海トラフ臨時情報の経験等から、健康面と命を守る行動面の 2 項目に分けマイナーチェンジしている。

(7) (6)への質疑応答と 20 周年記念式典内で公開したスライド視聴等の感想

C 委員：20 周年記念式典のスライドは、改めて開校からの 20 年の歴史を感じさせるものであった。

スライドの中の生徒は笑顔であふれており、学校生活が充実したものであったことが窺える。そんな南の丘分校の学校運営協議会の一員として携わらせていただいていることに感謝している。

D 委員：スライドの写真の中に、昨年度自分が携わった行事の写真が使用されており、うれしかった。次年度の学校経営計画の「〇〇している」の成果目標の表現は、目標がクリアになってとてもよい。

令和 6 年度学校自己評価(報告)の中で、過密過ぎない学習計画という話があったが、今年度から一学年の定員が 27 人となったことにより、生徒の実態差から難易度の設定や基準の置き方等の工夫が必要となるのではないか。その全体のバランスの難しさが今後出てくると思われる。年間指導計画を立てる上で、緻密すぎない弾力性も必要になってくる。

「人権」に係ることについては、自分自身がマジョリティの中に生活しているとわざわざマイノリティの側や人権について考えなくてもよい立場であり、教師側が人権について正しく理解していないと生徒に理解できるように説明したり指導・支援したりすることが難しい。必要となる力は、自分の人権が損なわれていると感じたとき「それは違う」と言えることであるとする。そのように考えると、次年度の学校経営計画書の相互に挨拶をすることが人権を意識することにつながるのかは検討が必要であると思われる。

E 委員：法務省等により人権の呼び掛けはなされているが、いざ自分が「人権とは何か」を問われたときに答えられる人がどれだけいるか。法的に見ると、世間的にもものすごく悪い人にも人権がある、という捉え方を。教育現場での人権は、お互いを人として尊重すること

はもちろん人権を尊重することではあるが、マイノリティへの理解、障害の有無の理解についてはどう考えたらよいか、非常に悩むところである。

A委員：自分は、高等部における人権は、キーワードとしては『自分の、相手のプライバシーを守る』ことであると考えます。社会に出る一歩手前として考えると自分自身をどう守るかの視点で人権を考えてもよいのでは。

D委員：「人権」は、世間一般的な意味での人権と育ってきた中で培ってきた価値観により形成された人権との両面があることを考慮したい。

A委員：次年度の学校経営計画の評価の際に、例えば委員それぞれの専門分野があるため、その専門分野の立場から評価すると、効果的かつ効率的に評価できるのではないかと思います。

⇒教頭：成果目標の状態にどこまで到達しているかは、今年度同様 A, B, C, D の 4 件法でのアンケート実施を考えている。

4 まとめ、御礼の挨拶(校長より)

たくさんの意見をいただき、貴重な意見の中から次年度の経営のヒントとなることを教えていただいた。

生徒の「分からない」の回答も、生徒自身が評価として選択していると認識してよいこと、自分に置き換えて考え、答えているのであればそれも教育効果であるという御意見は、新しい視点をいただいた気がしている。

また次年度に向けて、学校ホームページではどこにターゲットを絞った発信とするのか、意図的な仕掛けができるようにしていきたい。

進路に関しては、農福連携について御意見をいただき、南の丘分校の「作業学習」で栽培班の生徒たちが生き生きと取り組む姿が見られることから、仕事として携わっていく可能性も今後あるであろうと感じた。

次年度の本校の学校経営計画は、現段階では意義目標にはしていない。本校の規模でなく、まずは分校が一年を通して「ここに向かっていく」という指針を分かりやすく焦点化するという意図から、やってみようと考えたことである。

今後、「人権教育」のどこに焦点をおいて分校として取り組んでいくか、評価の仕方についても再検討したい。

